

武満徹の「**小さな空**」は昭和37年、連続ラジオドラマ『ガン・キング』の主題歌として書かれた。子どもの頃の懐かしい感情に、ふと胸を突かれるような歌。「**鐘が鳴ります**」は、北原白秋の詩に山田耕筰が作曲。遠くの鐘の音を思わせるピアノ前奏に始まり、暮れていく空を背景に、想い人を待つ感傷を歌う。「**早春賦**」は、中田章が大正2年に作曲した唱歌。作詞の吉丸一昌は、長野県安曇野の雪解け風景に感じ入り、この詩を書いたという。「**城ヶ島の雨**」は、北原白秋の詩に初めて曲がつけられたもので、作曲は山田耕筰。城ヶ島は三浦半島南端にあり、歌詞にある「利休鼠（りきゅうねずみ）」とは、緑色がかった灰色のこと。「**お菓子と娘**」は、フランス帰りの西條八十の詩に、橋本國彦による軽妙なメロディが添えられている。お菓子の好きなパリエンヌたちを通して、ハイカラで澁刺としたパリの空気を伝える。高田三郎と高野喜久雄の名コンビによる「**くちなし**」は、亡き父の面影をくちなしに重ね、清々しい旋律にのせて、故人に思いを馳せる。三善晃の「**貝がらのうた**」は、子どものための合唱曲として作られた。ふるさとを思う気持ちが、穏やかな波のようなメロディによって、やさしく歌い上げられる。「**鉾をおさめて**」は、遠洋の漁師たちの威勢のよさを描いた時雨音羽の詩に、中山晋平が作曲。藤原義江の歌唱で人々の愛唱歌となった。「**九十九里浜**」の作曲者は、新しい日本歌曲の創作に貢献した平井康三郎。作詞の北見志保子は大正から昭和に活躍した歌人。清新さあふれる歌曲となっている。文芸評論家・加藤周一による「**さくら横ちょう**」の詞には、中田喜直も作曲しているが、別宮貞雄のこちらの曲は透徹した詩情を漂わせている。武満徹の「**○と△のうた**」は、映画『不良少年』の劇中歌として、昭和36年に書かれた。負けず嫌いな主人公（非行少年）の性格が出ていて、愉快さあふ

れる歌。同じく武満徹の「**死んだ男の残したものは**」は、「ベトナムの平和を願う市民の集会」のために書かれた反戦歌。歌詞は詩人・谷川俊太郎。さらにもう1曲、武満徹による「**翼**」は、劇『ウィングス』の主題曲として書かれた器楽曲に、東京混声合唱団の委嘱で歌詞が付けられた。遥かな空の高みに、自由や希望の憧れを抱く歌。

「**花**」は、沖縄の音楽家・喜納昌吉の代表曲。多数のアーティストがカバーしており、平成18年には文化庁により「日本の歌百選」に選ばれた。「**えんどうの花**」は、子どもの頃に見た風景を懐かしむ金城栄治の詩に、沖縄民謡の第一人者・宮良長包が心を打つシンプルなメロディを付けた。「**さとうきび畑**」は、寺嶋尚彦が本土復帰前の沖縄を訪れた際、想を得て書かれた。戦禍の悲しみを歌っており、夏のさとうきび畑を吹き抜ける風の音が印象的に繰り返される。実際の歌詞は11番まである。「**芭蕉布**」は、戦後沖縄を代表する作曲家・普久原恒勇の曲に、吉川安一が歌詞をつけて、人気を博した。芭蕉布とは、芭蕉の繊維を使った織物で、涼しげな風合いが特徴。「**旅のころ**」は、当音楽祭でもおなじみの加藤昌則が、詩人・高田敏子の詩に作曲した。「**夕方**の三十分」は、詩集『小さなユリと』所収の黒田三郎の詩に、加藤昌則が作曲。夕餉に向かう父と小さな娘の慌ただしくも愛情の染みだした時間を描いている。「**さびしいカシの木**」は、アンパンマンの作者・やなせたかしの詩に作曲した、木下牧子の歌曲集《愛する歌》所収。穏やかな諦念を帯びたメロディに心が動かされる。「**夢みたものは**」は、24歳の若さで夭逝した昭和初期の詩人・立原道造が、亡くなる前年（昭和13年）に書き留めた詩に木下牧子が作曲。深い哀しみに裏打ちされた、ささやかな幸福への憧れを歌う。